

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：82619

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370150

研究課題名(和文)江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究

研究課題名(英文) Study on the beginning of natural history science by the Edo shogunate and on roles of Goyo-eshi

研究代表者

小野 真由美 (ONO, Mayumi)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・主任研究員

研究者番号：90356270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：わが国の自然史科学は、江戸中期(18世紀)の博物学からはじまった。本研究はその先駆的時代に、幕府と御用絵師が動植物の収集と自然観察を行っていたことに着目した。奥絵師・探幽とその甥・常信は写生図「草花写生図」「草花魚貝虫類写生図巻」等を描いたが、幕府重臣や藩主、儒官などが動植物などの被写体を提供した。とくに探幽は稲葉正則と交友があり、ドドネウス著『草木誌』を実見した可能性がある。また常信は公家・近衛家熙と親交をもち、植物図譜の嚆矢「花木真写図巻」に影響を与えたと考えられる。常信の写生図は享保年間の全国産物帳へと展開した。また常信から家熙、渡辺始興、円山応挙へと写生図が発展していった。

研究成果の概要(英文)：Natural history science in Japan began with natural history in the mid-Edo era (18th Century). This study focused on the fact that the shogunate government and Goyo-eshi conducted natural observation in the pioneering period (17th Century). While the shogunate painter Tan'yu and Tsunenobu painted the "Sketches of Flowering Plants" and "Sketches of Flowering Plants, Fish, Shellfish, and Insects," it was found that senior vassals of the government, feudal lords, etc. provided animals and plants. In particular, Tan'yu had a relationship with Masanori Inaba, and might have actually seen "Cruydeboeck" written by Rembert Dodoens. Tsunenobu also had a relationship with the court noble lehiro Konoe, and seems to have influenced the first illustrated plant catalog "Flowers and Trees." Sketches by Tsunenobu led to a compilation of a local product list during the Kyoho era, and in the field of arts, were succeeded to lehiro, Shiko Watanabe, and Okyo Maruyama.

研究分野：日本絵画

キーワード：江戸幕府 御用絵師 写生図 蘭書 画論 色材 博物学 狩野派

1. 研究開始当初の背景

(1)本科研代表者は、江戸幕府の御用絵師・狩野探幽と常信による鑑定控え「探幽縮図」「常信縮図」の調査を行ってきた(「新収品紹介探幽縮図」『MUSEUM』598・601、2005・2006年)。さらに研究分担者として、幕府関連資料を調査してきた(研究代表:高橋裕次基盤研究B「江戸幕府旧蔵資料の総合的研究」2005~2007年)。本研究代表者が所属する東京国立博物館は、探幽と常信による写生図を多数所蔵しているが、それらは従来「画稿」と位置づけられてきた。しかし歴史的にみると、その背景には、幕府の関与が想定される。そこで本科研代表者は探幽と常信の写生図制作と幕府との関連、さらに江戸初期における幕府主導の自然史研究に着目するにいたった。

(2)わが国の博物学(Natural history)は、江戸中期(18世紀)以降に発展するが、享保の改革(1716~)が果たした意義は小さくない。例えば幕府は、丹羽正伯に稲生若水の編纂した『諸物類纂』の増補作業を命じ、享保19年(1734)には「諸国産物調査」を行って、殖産興業を牽引した。しかし本研究が着目する探幽・常信による写生図制作は、これに六十余年先立って行われたものであり、このような動植物の詳細な観察と記録の実行は、享保の改革の先駆的な事業であったと考えられる。これは美術史のみならず、自然史を研究対象とする諸分野においても注目すべきことである。すなわち、わが国における自然史研究の萌芽の時期は、享保の改革以前の17世紀に求めるべきと思われるのである。

(3)わが国では、元禄期(18世紀)までに綿、砂糖、絹など、それまでの輸入作物の国産化がなされていたが、こうした農作物の安定した生産を可能にした背景には、17世紀における農書の編纂や動植物の研究成果があったといえよう。江戸では、17世紀初頭に李時珍著『本草綱目』が輸入されたのを契機として、古代からの本草学がめざましく発展したが、さらに万治2年(1659)にはドドネウス著『草木誌』が幕府に献上されるなど、西洋の植物学などが流入した。そのような背景のもと、幕府は諸国から動植物を採集し、御用絵師に記録させようと試みたとみられる。元禄期には結実していた農書等の研究はどのようにはじめたのか。その一端として探幽と常信の写生図を位置づけ、江戸幕府における御用絵師の知られざる役割について考察するにいたった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、探幽と常信の写生図を精査することで、幕府による自然史研究の萌芽の時期をとらえ、江戸中期以降の博物学および科学の発展の端緒を明らかにすることにある。さらにその背景に西洋から輸入された

植物学などの影響があったこと、そしてそれをいち早く図像(イメージ)として受容したのが他でもなく御用絵師であったことを提示しようとするものである。

よってまず、探幽と常信が描いた写生図42巻(探幽筆「草花写生図巻」5巻、常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」29巻、同「鳥写生図巻」8巻)所収の1500点をこえる写生図の全体像をとらえる必要がある。そこからドドネウス著『草木誌』との関連をみだし、幕臣をはじめ、探幽、常信といった御用絵師が、西洋の植物図などをいかに受容したか、それらが江戸文化にどのような影響を与えたかを究明する。探幽と常信の写生図の意義としては、のちの博物図譜への影響がもっとも顕著なものであろうが、より直接的に影響を及ぼした例として、近衛家熙の「花木真写図巻」が挙げられよう。本研究では常信と交友のあった家熙が、どのように植物図譜編纂を完成させたかについても考察し、江戸初期から中期(17世紀から18世紀)の写生図制作、自然観察、そしてその記録にいたる道筋を明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1)まず第一に探幽と常信の写生図42巻所収の約1500点について、各図を撮影した。そして各図の注記を全て判読し、「年紀」「品目」「産地・地名」「提供者」の項目によって整理し、データベースを作成した。

(2)次に探幽、常信による写生図が、江戸文化にどのような影響を与えたかを探るため、「花木真写図巻」3巻(京都・陽明文庫)を調査し、全ての画像と植物の「名称」「現在の名称」「用途・特徴」についてデータベースを作成した。

(3)さらに、江戸幕府旧蔵のアントワープ版『草木誌』(東京国立博物館)を中心に、『草木誌』の記述方法や植物図の構図などを分析し、探幽、常信が受けた影響を考察した。また探幽が『草木誌』を実見した可能性については、探幽に近い人物が『草木誌』を所持していたことを明らかにすべきである。そのため幕府重臣・稲葉正則を中心に、『草木誌』輸入をめぐる背景を調査した。

(4)探幽と常信の師弟関係を明らかにするため、各図の年代順の動向とその背景を調査した。

(5)常信と交友のあった近衛家熙について、本草学、蘭学、写生図の観点から「花木真写図巻」を中心に調査した。

4. 研究成果

(1)探幽と常信の写生図約1500点の各図とその注記について、「画像」「年紀」「品目」「産地・地名」「提供者」の項目によるデータベースを作成し、画像については東京国立博物館ウェブページの「画像検索」で広く一般公

開し、また「草花魚貝虫類写生図巻」の注記データは論文中の資料として刊行した。その他の注記データは、国立情報学研究所ウェブページにおいて公開した。

以上のデータを検証した結果、次のことが明らかになった。

常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」の被写体の提供者のうち約30名が『寛政重修諸家譜』などによって同定できた。その多くが藩主や幕臣、儒官で、このことから常信に動植物を提供していた人物の多くが、幕府関係者であることがわかり、さらに、江戸城西の丸の庭園からも植物が複数提供されていることが明らかとなった。よって常信の「草花魚貝虫類写生図巻」は、幕府の命による公的なものである可能性がひらけた。

被写体の提供者には次の人物がふくまれていた。

a) 徳川光圀(1628~1701)

水戸藩主。穂積甫庵に『救民妙薬』を編集させるなど、薬草や農作物、舶来の動植物への関心が高かった。常信に胡椒(コショウ)や肉桂(シナモン)、唐防風を提供した。

b) 堀田正俊(1634~84)

古河藩主。常信に下屋敷よりアジサイを提供した。正俊は常信と親しく、その交友については、戸田茂睡『御当代記』に伝わる。

c) 徳川綱豊(家宣、1662~1712)

六代将軍。甲府藩主の時に常信にサンシュユや「名不知」と記された白い花などを提供した。

d) 人見竹洞(1637~96)

林羅山門下の儒学者。父は官医・人見玄徳で、弟は『本朝食鑑』を著した人見必大。常信と親しく交友し、植物も提供した。

e) 柳原資廉(1644~1712)

従一位権大納言。『関東下向道中記』に江戸への勅使のようすを記す。常信にテマリを提供した。

f) 新井君美(白石、1657~1725)

木下順庵に学び、のちに将軍となる徳川綱豊(家宣)の表寄合並となり、正徳元年(1711)に布衣を許された。常信にタチバナを提供した。

g) 丹羽長守(1643~1726)

長崎奉行。常信にジャスミンを提供した(図参照)。

h) 小林正府(1655~1739)

八丈島代官。常信にウミテングを提供した。



狩野常信「草花魚貝虫類写生図巻」巻13 ジャスミン

常信の写生図の年代順の動向と被写体の提供者をみると、元禄16年(1703)に質の高い写生図が描かれ、藩主からの提供も多いことがわかった。よって、この時期に幕府周辺で写生図制作を促す気運が興ったとみることができよう。この頃、元禄国絵図が制作された。元禄国絵図は、元禄9年(1696)に幕府より諸国の国絵図の校訂が命じられ、同15年(1702)までに完成し、献上されたものである。おそらくこの時期に、全国の地理や産物への関心が高まったと想像される。藩主にとっても自国の地理や産物へと目を向ける契機となっただろう。

この三十余年後の享保20年から元文4年(1735~39)にかけて、諸国に『産物帳』の編纂が命じられることになるのだが、常信の写生図は『産物帳』に先駆ける作例であることがわかった。『産物帳』編纂時には老中・松平乗邑が代官、領主、地頭へ「諸国之産物俗名並其形」を収集させ、丹羽正伯へと届けさせたが、同様のシステムが常信の写生図制作の背景にすでにあつたと考えられる。

御用絵師の写生図制作を幕府が命じたすると、拝命したのは奥絵師の探幽と考えられるが、写生図の量からみると、常信が主体となって行ったと思われる。探幽と常信の動向を分析すると、探幽は寛文元年から寛文5年(1665)まで熱心に描いているが、翌年から減少し、寛文6年以降はかわって常信が大量に制作しはじめる。こうした二人の写生図の動静をみると、寛文5年に探幽から常信へと写生図の伝授があつたことがみてとれる。

(2)なお、探幽の写生図には、ドドネウス著『草木誌』の影響がみられることから、探幽が同著を実見しえた可能性を調査したところ、稲葉正則との関係がうかがひあがつた。正則は小田原藩主。春日局の嫡孫で、オランダ商館との交易をとりしきった人物である。探幽と正則は茶の湯などの数寄の道で交友があり、稲葉邸に頻繁に出入りしていたことが『永代日記』(稲葉家文書)から明らかになった。モンタヌス著『日本誌』によれば、ドドネウス著『草木誌』を受け取つたのは正則であり、「もっと大きな、美しく描いたもの」を所望したという。これらのことから、正則の周辺での『草木誌』の受容がうかがえ、また探幽がそれを実見した可能性も高まったといえる。『草木誌』の正確で緻密な植物図は、幕府関係者に大きな衝撃を与えたと想像される。その正確さのみならず、全体と部分を一図に描く構図法などは植物の特徴を記録するのに有効であつた。そうした「記録」に特化した写生法は、探幽から常信へと伝授されたことがわかった。

(3)また、『草木誌』の“「記録」に特化した写生法”は、常信から直接的に近衛家熙へと伝えられたとみられる。家熙の言行を記した『槐記』の記事や、宝永6年(1709)の内裏紫宸殿賢聖障子絵制作の記録から、家熙と常信の交友は明らかである。とくに『槐記』にみ

られる家熙の写生への傾倒や、本草学への造詣の深さからは、当代随一の知識人の優れた洞察力がうかがえる。常信が手がける写生法を知った家熙が、「花木真写図巻」にそれを取り入れたのは当然のことといえる。近衛家の近習の絵師・渡辺始興も正確で緻密な写生図をのこしている（「鳥類真写図巻」三井記念美術館）。そして江戸の写生画家と謳われる円山応挙は、始興の写生図を模写することでそれを学んだ（「写生帖」東京国立博物館）。以上から、探幽が描いた瑞々しい写生図が常信へと手渡され、それが家熙、始興、応挙へと連なっていったことがみえてきた。その底流には古来、わが国で受け継がれてきた本草学と西洋の新たな知識との融合があった。絵師が「イメージ」として受容し、展開していった写生の意義はきわめて大きい。御用絵師による写生図が、のちに博物学などの知の領域に新たな息吹を吹き込んでいったといっても過言ではないのである。

引用文献

松木明知『日本麻酔科学史の知られざるエピソード 戦前篇』真興交易(株)医書出版部、pp.51-53、2016年
辻幸治「この図『草花魚貝虫類写生図巻』は歴史上で初めて寒蘭が描かれた図ではないだろうか?」『園芸 JAPAN』525、pp.10-11、2015年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8件)

小野真由美「狩野探幽筆草花写生図巻 所収写生図の年代順の動向と被写体の提供者について」『MUSEUM』657、査読有、pp.45-61、2015年

小野真由美「狩野探幽筆『四季花鳥図』について」『傘松』863、査読無、pp.52-53、2015年

小野真由美「異国趣味と博物図 若冲の夢見た楽園」『別冊太陽』227、査読無、pp.86-89、2015年

小野真由美「予楽院の庭 陽明文庫所蔵「花木真写」考」『國華』1429、査読無、pp.7-18、2014年

小野真由美「狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」の制作背景 所収写生図の年代順の動向と被写体の提供者について」『東京国立博物館紀要』49、査読無、pp.63-165、2014年

小野真由美「近衛家と典薬頭・錦小路頼庸 その日記にみえる絵事について」『MUSEUM』646、査読有、pp.27-48、2013年

松島仁「狩野探幽筆 海棠に尾長鳥図」『國華』1428、2014年

〔学会発表〕(計 1件)

小野真由美「江戸の写生図 可憐なる花卉

図の源泉」東京国立博物館月例講演会、東京国立博物館大講堂（東京都）
2015年9月26日

〔図書〕(計 1件)

小野真由美『江戸の写生図 可憐なる花卉図の源泉』、精興社、pp.1-8、2015年

〔その他〕(計 3件)

特集展示「江戸の写生図 可憐なる花卉図の源泉」(於)東京国立博物館特別2室、2015年9月29日～10月25日

国立情報学研究所 researchmap「研究成果公開」ウェブページ

<http://researchmap.jp/onomayumi/%E8%B3%87%E6%96%99%E5%85%AC%E9%96%8B/>

東京国立博物館ウェブページ

特集展示「江戸の写生図」

http://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1751



展示風景「江戸の写生図 可憐なる花卉図の源泉」
東京国立博物館（平成27年9月29日～10月25日）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 真由美 (ONO, Mayumi)

東京国立博物館・学芸研究部主任研究員
研究者番号： 90356270

(2) 研究協力者

松島 仁 (MATSUSHIMA, Jin)

静岡県 文化・観光部文化局
世界遺産センター整備課 准教授